衛星、船着場、または新しい軌跡

香織１、２、３
次郎１、２、３
秀人１、２、３
省吾１、２、３
由佳１、２、３
橋本１、２、３
吉田１、２　　（１階-２階の吉田は同じ人物）
紀子１　　　　（１階-３階の紀子は同じ人物）
光希１　　　　（１階-３階の光希は同じ人物）

受付１、２、３（場内アナウンスも担当）

係員 a、A、α
係員 b、B、β
係員 c、C、γ

その他、観客たち

※ それぞれ、１は１階にいる人物、２は２階にいる人物、３は３階にいる人物
※ 各階によって、人物間の関係性が異なるが、基本的に同一名称は一人の人物が兼任

福島市にある、公営ギャンブルの場外券売場３つが一緒に入った建物
１階-サテライト福島（競輪）、受付、トイレ、喫煙所、食堂、静養室、お客様相談室
２階-ボートピア福島（競艇）、受付、トイレ、喫煙所
３階-ニュートラック福島（競馬）、受付、トイレ、喫煙所、展望テラス

Part１：１階-サテライト福島

平日の午後。客足はまばら。
壁に備え付けられた、または天井から吊るされた多数のモニターを見つめている観客たち。

観客たち「お、きた」「まくれー！」「ありゃダメだ」「そのまま。そのまま！」「出てくんな！」

モニターの向こうで、レースが終わる。
観客たち…投票券を破る・喫煙所にタバコを吸いに行く・椅子に座って新聞を覗き込む・次のレースのマークシートを記入する。等々。
係員 a、b、c が場内を巡回している。

手足の不自由な次郎１の代わりに、香織１がマークシートに記入している。

次郎１「２」
香織１「２ですね？」
次郎１「あと７」
香織１「７。はい、７。２と７」
次郎１「…あとひとつだっけか？」
香織１「ええ。三連単っていうのなんで」
次郎１「あとひとつか…」
香織１「やっぱり、二つのにしときます？」
次郎１「いや。あとひとつ。あとひとつ。あとひとつなあ…」

場内へ入ってくる紀子１、光希１。

紀子１「１階はいわきなんだ」
光希１「(案内見て）えーっと、２階が常滑で。盛岡が３階」
紀子１「常滑ってどこ？」
光希１「(案内見て）愛知だって」
紀子１「東北だけじゃないんだ」
光希１「そうみたい」
紀子１「…なんか、すいてるね」
光希１「こんなもんなんじゃないの？ よく知らないけど」
紀子１「もっと騒がしいとこかと思ってた」

光希１「レース始まれば、うるさくなるかもよ」
紀子１「音じゃなくて、空気。…ここの空気は、ずっと静かなままじゃないかな」
光希１「空気？ 雰囲気みたいなこと？」
紀子１「…ちょっと違うけど、まあそんなもん」
光希１「ここ、静かかなあ…」
紀子１「…教会みたいなところ」

紀子１と光希１、場内を見て回る。
レースの確定が出て、払い戻しが始まる。

受付１（場内アナウンス）「いわき競輪第 10 レース。的中券の払い戻しは、自動券売機にて行えます。当施設では自動券売機以外での払い戻しは行っておりませんので、ご了承ください。また、払い戻しの期限は、レースの着順確定後、60 日までとなっております」

省吾１、壁際にある自動券売機で、的中券の払い戻しをする。
札を数えながら、椅子に座っている由佳１のもとへ。由佳１に札を渡そうとする。

由佳１「なに？ いらない」
省吾１「遠慮するなよ。どうせ身につかない金なんだから」
由佳１「…ここで一日潰すなんて思ってなかった」
省吾１「仕方ないだろ。当たるんだから」
由佳１「負けたら負けたで、もう一回って言うんでしょ」
省吾１「違うよ」
由佳１「ホントに？」
省吾１「お前も見てたろ？ 当たり続けてさ。結局一回も外してない。これはすごいことだよ」
由佳１「さっさと負ければいいのに」

喫煙所でタバコを吸っている吉田１と橋本１。

橋本１「…タトゥー彫るわ」
吉田１「…は？」
橋本１「なんか、いま決めたわ」
吉田１「いま？」
橋本１「うん。たったいま」
吉田１「なに？ オンナの名前でも入れんの？」

橋本１「13 って、数字彫るわ。（肩を示して）ここに」
吉田１「…なんで？」
橋本１「いま、気づいたんだわ。俺はその数字に支配されてる」

省吾１「自分でもびっくりしてるんだ。毎回、思いついた数字を書いて、その通りになる。
…こんなこと、一生に一度かもしれない」
由佳１「こんなことに運使っちゃって」
省吾１「それはない」
由佳１「なんで言い切れるの？」
省吾１「理屈に合わないから」
由佳１「どういうこと？」
省吾１「そもそも運っていうのはね。機会ごとに生じるものなんだ。次回に繰越できない」
由佳１「なに？ その屁理屈？」
省吾１「大数の法則によればそうなるんだ」
由佳１「なにそれ？ 占い？ 四柱推命みたいなの？」
省吾１「違うよ。数学だよ。確率論だ」

次郎１と香織１のもとへ、秀人１がやってくる。

秀人１「あれ？ まだ決まんないの？」
香織１「ごめんなさい。わたしが決められなくて」
秀人１「あれ？ じいちゃんどうしたの？」
香織１「おじいさんに頼まれてるんです」
次郎１「この子はね、どうも運持ってるような気がしてね」
秀人１「いやいや。だとしても、じいちゃんのために運使わせちゃダメだよ」
次郎１「そうか。そうかもな」
香織１「いやいや。全然構わないですから」
次郎１「ただでさえ世話になってるのに、運まで使わせて」
香織１「…もう決めましたから」

省吾１「サイコロの目が出る確率は１/６だ。当然１が出る確率も１/６だね」

由佳１、黙っている。

省吾１「…ただ、ここで言われてる確率１/６は、６回サイコロ振ったら、１回は１が出るって保証してるわけじゃない。サイコロを振る回数をどんどん増やしていくと、だいたい

平均して６回に１回くらいの割合で１が出るよ、って言ってるだけだ。これが大数の法則。…それは時間無制限で、無限にサイコロが振られることを想定してる。つまり、サイコロを５回振って一度も１が出なかったからといって、６回目に１の目が出る確率は、過去５回と全く変わらない。なぜなら、サイコロ自体は過去５回に振られた時、自分がどんな目を出したのか覚えていないから」

吉田１「お前、こないだキシリトールに支配されてるって言ってなかったっけ？」
橋本１「それは昔の話」
吉田１「あ、そうなんだ」
橋本１「とっくに解放された」
吉田１「…おめでと」
橋本１「解放されるのが嬉しいとは限らないんだわ」
吉田１「割と複雑なんだな」
橋本１「むしろ寂しいこともある」
吉田１「…でもさ。それじゃあ。13からも早々に解放されるんじゃないの」
橋本１「そうかもしんない」
吉田１「バカ。じゃあ彫るんじゃねえよ」
橋本１「むしろ逆だ。支配されてたことを覚えておきたいんだわ」
吉田１「なにそれ？ やめとけよ」

省吾１「サイコロは１回ごとに新鮮な気持ちで６回目を転がる。ということは、過去５回の結果は６回目のサイコロにまったく影響を及ぼさない。サイコロに過去はない。サイコロにとっては、いま現在、その時に振られる１回しか存在しない。…新しくサイコロが振られる。それはサイコロにとって、新しい世界が立ち上がるのと一緒だ。そこで振られる１回１回はまったく別の新しい世界で、その世界同士は完全に等価だ」

香織１「顔が好きです。だからこの人」
秀人１「身も蓋もないね」
香織１「顔は人ですから。…自転車は人が漕ぎますからね」
秀人１「まあ、そうかもしれないけどね」
香織１「ダメですか？」
次郎１「正直でいい。それ書いといて」
香織１「はい」

香織１、マークシートに書き込んで、自動券売機へ。

省吾１「これは、運についても同じことだと思うんだ。つまりさ、１回前の機会で運を使わなかったからといって、次の機会で運が手元にあるとは限らない。もし運があるのであれば、あるときに使わないと失われる。そして、失った運は二度と取り戻せない。だってそれは、別の世界のものだから」

由佳１「…あなたって、普段からそんなこと考えてるの」
省吾１「いつもではないけど、たまに」
由佳１「…なんか、全然知らない人みたい」

由佳１、途方に暮れてその場に座ったまま。
省吾１、新しいマークシートを取りに、テーブルへ歩いていく。

携帯を見ていた光希１、紀子１の肩をたたく。

光希１「連絡きた」
紀子１「処理していいって？」
光希１「うん」
紀子１「じゃあ行こう」
光希１「競馬は…３階か」
紀子１「うん。エレベーターで行こう」

光希１と紀子１、場内から出ていき、エレベーターの前へ。

橋本１「明日仕事抜けるから、よろしく」
吉田１「え？ お前、仕事休んで彫りに行くの？」
橋本１「もう予約したわ」
吉田１「バカじゃねえの」
橋本１「俺にとっては大事なことなんだわ」
吉田１「…勝手にしろよもう」

吉田１、タバコの火を消す。

吉田１「俺、ちょっと２階見てくる」
橋本１「ああ。うん」
吉田１「お前どうする？」
橋本１「俺はいい」

吉田１「じゃ、後でな」

吉田１、受付の前を通って場内から出ていく。会場出てすぐの階段を上っていく。
吉田１が階段を上るうちに、観客たちの配置が変わる。光希１と紀子１はいなくなる。
席替えのように、場内の人々が再編成される。

Part２：２階-ボートピア福島

吉田１、階段を２階に上がって場内へ。
平日の午後で、客足はまばら。係員 A、B、C が場内を巡回している。

手足の不自由な橋本２の代わりに、次郎２がマークシートに記入している。

橋本２「１」
次郎２「１ね」
橋本２「あと３」
次郎２「はいはい。１と３ね」
橋本２「あと 13」
次郎２「はいはい 13 ね。１と３と 13」
橋本２「うん」

吉田１、橋本２と次郎２の前を通る。そのまま歩いてく。

次郎２「…あれ？ じいちゃん。これ、1313 で 13 が２個になってるよ？」
橋本２「うん。13 の繰り返し」
次郎２「13 好きなの？」
橋本２「うん。俺のラッキーナンバーだから」
次郎２「だったらさ。１と３だけとか、13 だけでも買えるけど」
橋本２「いい。繰り返しでいい」

吉田１、モニターを眺める。やってきて、その隣に立つ、秀人２と由佳２。

秀人２「どうも」
由佳２「こんちは」
吉田１「よく会いますね」
秀人２「ここに来るとなにかやってるからね。ついついね」

由佳２「かよっちゃうよね」
吉田１「わかります」
秀人２「でも兄ちゃん、ほんとよく来てるよね」
由佳２「なにしてる人なの？ プロ？」
吉田１「(笑って) プロじゃないですよ」
由佳２「そっか。それっぽいから。なんていうか、たたずまいが」
吉田１「やめてくださいよ」

受付２（場内アナウンス）「常滑ボート第 11 レース。投票券の締め切り時刻は 16 時 13 分となっております。当場外券売場では、自動券売機での締め切り後、投票券の販売等は一切行っておりません。何卒、ご了承のほど、お願いいたします。また、自動券売機以外での販売行為を見つけられた場合は、お近くの係員までお知らせください」

省吾２、壁際にある自動券売機で、的中券の払い戻しをする。
札を数えながら、椅子に座っている香織２のもとへ。香織２に札を渡す。

省吾２「お前のアドバイス、冴えてるな。二連チャン」
香織２「(札を受け取り数える) 数字とかでごちゃごちゃやってるからダメなんだよ」
省吾２「お前なに見てんの？」
香織２「顔だよ。顔。顔見りゃだいたいわかんでしょ」
省吾２「顔？」
香織２「まくり差しで決める男は顔がいいんだよ」
省吾２「顔ねえ」
香織２「スッとしてるっていうかさ。決めますって感じで」
省吾２「ふうん。決めますねえ」

吉田１「お二人は？ もしかしてプロなんですか？」
秀人２「まさか」
由佳２「食ってけなくはないけどね」
吉田１「うそ」
由佳２「ほんと」
吉田１「プロ並み？」
秀人２「実はコイツが数字に強くてさ。…コイツ、保険会社で、数理士の仕事してんのよ」
吉田１「数理士？」
秀人２「あれだよ。統計とって、リスク分析して、保険料計算したりする」
吉田１「ああ。なんていうか、それ系の…」

秀人２「あんまり当たるもんだから、俺が口実作って会社抜けさせてんだよ」
由佳２「お得意さんだから。この人の会社」
吉田１「数字的なコツがあるんですか？」
秀人２「ベイズ推定」
吉田１「は？」
秀人２「ってのを使うんだと」
吉田１「ベイズ？」

橋本２「お前、ちゃんと働いてるのか？」
次郎２「なんで？」
橋本２「最近な、いっつもいっつも連れて来てくれるだろ？」
次郎２「じいちゃんがさ、家で暇そうだから。…ここだと、来ればなにかやってるし」
橋本２「嬉しいんだけどな。心配になってきたよ」
次郎２「大丈夫だから」
橋本２「…もしかして、仕事クビになったのか？」
次郎２「やめてよ」
橋本２「どうなんだ？」
次郎２「仕事は大丈夫だよ」
橋本２「怒らないから言ってみろ」

由佳２「ベイズってのはね。
　　　前もって広くデータが取れない、要は、すごーく起きにくいことを推論する方法ね」
吉田１「はあ…？」
由佳２「だいたいはね。パラメータとか、仮説の不確実性を確率で示してさ、推論するわけ」
吉田１「えーと…」
由佳２「なんていうかね。頻度論はデータをもとに確率を導き出すんだけど。
　　　ベイズ推定はね。もっと、ありえないことが起こる確率を予測するのに便利なのね。
　　　これは確率ってものを現象として捉えるか、観測者の主観として捉えるかの違いね」
吉田１「えーっと、その。なんていうかですね…」
由佳２「あ、そうだ。ちなみに頻度論ってのはね。
　　　サイコロ振り続けると、目が出る確率が１/６に限りなく近づくっていうあれね」
吉田１「すいません。全然わかんないす…」

香織２「あんたはダメな顔だ」
省吾２「なんだよ。いきなり、ケチつけて」

香織２「最終コーナーで持ってかれそう（笑う）」
省吾２「うるせーよ」
香織２「だってそういう顔してんだもん」
省吾２「いいんだよ。別に。レースでないんだから」
香織２「うわー。負け惜しみ」
省吾２「なんとでも言え」
香織２「顔は変えられないもんね」
省吾２「おい！ そういうお前は？ お前どうなんだ？」
香織２「あ？ そういうこと言っちゃう？ 言っちゃうんだ？」
省吾２「わ。なんだよメンドクセーな」
香織２「めんどくさいって言ったー。この人私のことめんどくさいって言ったー」
省吾２「底なしにめんどくせえな」
香織２「泥沼って言ったー。この人私のこと」
省吾２「泥沼じゃなくて底なしだよ」

秀人２「とにかくあれだ。予測できなそうなことも、実は数学的に予測できるわけ」
吉田１「はあ」
由佳２「ちなみに、ラスムッセン報告ってのがあってね。これはベイズ推定を使って…」
吉田１「あ、大丈夫大丈夫。そういうの、もう大丈夫です」
由佳２「そう？」
吉田１「聞いてもわかんないんで」
秀人２「つまりさ。要するに、俺たちは知らず知らずのうちに、数字に支配されてるわけだ」
由佳２「まあそうだよね」
秀人２「ただし、数字の秘密を知れば、逆に俺たちは数字を支配できる」
吉田１「…いまいちピンとこないっすけどね」
秀人２「実践すればわかるかもよ」
吉田１「え？」

次郎２「…クビになった」
橋本２「なにしたんだ？」
次郎２「これ」

次郎２、腕をまくって見せる。肩にタトゥーが彫ってある。

橋本２「刺青なんか彫ったのか」

次郎２「タトゥーだよ。これ見つかって、辞めろって…」
橋本２「なんで彫った？」
次郎２「なんか気分変えたかったんだよ」
橋本２「寝ぼけたこと言うな。彫ったところでお前はお前だろうが」
次郎２「いいだろ別に。その時はそう思ったんだよ」
橋本２「なんだこれ？ なんて書いてあるんだ？」
次郎２「まだ途中だよ」
橋本２「なんて書こうとしてるんだ？」

由佳２「でもこれ、ホントに当たるから気をつけてね」
秀人２「やばいやつだから」
由佳２「真実ってのは大抵やばいからね」
吉田１「なんか急に気になってきたな」
秀人２「でも、ここだと聞かれるから、ちょっと別のとこいこ」
吉田１「別のとこ？」
由佳２「うん。…喫煙所、いま誰もいないよ」
秀人２「そこにするか。いこっか」

すると３人のもとに、係員A、B、Cがやってくる。

秀人２「なに？」
係員A「またあんたらか」
由佳２「どうしたの？」
係員B「お前ら、コーチ行為しようとしてるだろ？」
由佳２「なに？ なんのこと？」
秀人２「いやあ…ちょっとなに言ってるかわかんない」
係員A「懲りないなあ。コーチ屋は違法なんだよ。知ってるでしょ？」
秀人２「いやいや。ちょっと世間話してただけだって」
由佳２「そうだよ。っていうか、そもそもコーチ屋ってなに？ バッグかなんかのブランド？」
秀人２「コーチ屋のバッグって、なんかバッタもんぽいな」
由佳２「わたしやだ。そんなバッグ欲しくない」
吉田１「コーチ屋？」
係員C「そうだよ。あんた、カモにされてんだよ」
吉田１「俺が？」
秀人２「なに変なこと言ってんだよ」
吉田１「この人たち、そうなんですか？」

由佳２「違うよ」
秀人２「勘違いだって」
由佳２「失礼だなあ…」
秀人２「本当になあ…」

秀人２と由佳２、ブツブツ言いつつ、さっさと場内から出て行く。
係員 A と B、秀人２と由佳２の後をついていく。

香織２「…確かに底なしだよね」
省吾２「なにが？」
香織２「…こんな生活、このまま続けててもさ」
省吾２「大丈夫だよ。そのうち俺がなんとかするから」
香織２「ホントかなあ」
省吾２「大丈夫大丈夫。大丈夫だって」
香織２「…あーあ。誰もわたしのこと知らないとこに行きたい」
省吾２「なんで？」
香織２「…人生やり直したい」
省吾２「場所変えたくらいじゃ、お前の人生変わんないって」
香織２「…どっか遠いとこ行きたいなあ」

係員 C「あんたも気をつけなよ」
吉田１「あの…ベイズ推定は？」
係員 C「は？」
吉田１「ラスムッセン報告は？」
係員 C「なにそれ？」
吉田１「全部嘘？ それとも本当の話ですか？」
係員 C「…自分で調べたら？」
吉田１「あ…。はい」

吉田１、その場で途方に暮れている。係員 C、レシーバーを出して、

係員 C「あー３階？ あれ？ こちら２階。こちら２階ですが。
あれ？ 聞こえてます？ 応答願います。もしもし。もしもし。もしもーし…」

係員 C がレシーバーに問いかけている間に、観客たちの配置が変わる。
光希１と紀子１が場内に入って配置につく。席替えのように、場内の人々が再編成される。

Part３：３階-ニュートラック福島

係員α、レシーバーを取る。

係員α「はいはい３階です。…はい３階。…またあいつら？ はいはい。懲りないなあ。はーい」

係員α、レシーバーを切って、場内を回り始める。係員β、γと合流して場内を巡回する。
香織３に付き添っている省吾３と由佳３。３人、座ってモニターを見ている。

香織３「やっぱりね。気持ちだけは大きくいきたいもんだね」
由佳３「大穴ですか？」
香織３「うん。そうさね。…当たると一番大きいのはどれだい？」
省吾３「三連単で 1313 倍ってのが一番かな？」
由佳３「…２-４-７の三連単ですね」
香織３「じゃあ、それにしよう」
省吾３「２と４と７だね」

省吾３、手足の不自由な香織３の代わりに、マークシートへ記入を始める。
紀子１、香織３たちの様子を窺っている。場内を見回っていた光希１、紀子１の肩をたたき、

光希１「どうする？」
紀子１「まだ待って」
光希１「でも」
紀子１「もうちょっと」

香織３「ほんとは自分で全部できたらいいんだけどね」
省吾３「気にしないでよ」
香織３「…手も足も悪いし、頭もこんな調子で」
由佳３「頭はしっかりなさってるでしょ？」
香織３「そう言ってくれるのはありがたいけど、覚えた先から抜けてっちゃうからね」
由佳３「でも、馬のことはよく覚えてらっしゃいますね」
香織３「それは好きだからね」

秀人３と橋本３、喫煙所から出てくる。係員α、β、γと鉢合わせになる。
係員γ、秀人３に気づく。秀人３も気づいて手を挙げる。

秀人３「ご苦労さん」
係員γ「なに？ 非番なのに来てんの？」
秀人３「今日、俺金運がいい日だから。稼いどかないと」
係員γ「ほんと好きだなあ」
秀人３「お前もやってけば？」
係員γ「バカ、仕事中だ」
秀人３「手数料安くしとくよ」
係員γ「アホ。職員がノミ屋みたいなことして」
秀人３「真面目だなあ」

係員たちと秀人３、橋本３、手を挙げて別れる。

受付３（場内アナウンス）「盛岡競馬第 12 レース。投票券締め切り５分前になりました。投票される方はお早めに自動券売機にてお買い求めください。当場外券売場では、自動券売機での締め切り後、投票券の販売等は一切行っておりません。何卒、ご了承のほど、お願いいたします。また、自動券売機以外での販売行為を見つけられた場合は、お近くの係員までお知らせください」

省吾３「いくらにする？」
香織３「今日はもう最後のレースだったね？」
省吾３「うん。そうだよ」
香織３「じゃあ、あるだけ賭けちゃおうか？」
省吾３「いいの？」
香織３「いいよ」
由佳３「本当にそれでいいんですか？」
香織３「せっかくだからね」

由佳３、バッグから封筒を出して、封筒ごと省吾３に渡す。
省吾３、札を数える。札を封筒に入れて、自分の上着のポケットへ。

省吾３「じゃあ、ばあちゃん。５万円、確かに受けとったからね」
香織３「それだけだったかい？」
省吾３「うん。ばあちゃんも数えてみる？」

香織３「いいよ。お前に任せてるから」

省吾３と由佳３、顔を見合わせる。
次郎３と吉田２、それぞれ自動券売機で投票券を買って、受け取る。席に戻りながら、

次郎３「それでアイツ。俺の名前、タトゥーに彫っちゃってさ」
吉田２「ウソ？ それシールじゃなくて？」
次郎３「ないない。俺も確認した。ガッツリ彫ってたよ」
吉田２「うわー、本気のやつだ」
次郎３「(肩を見せて) ここんとこにローマ字で。JIRO、ジローって」
吉田２「うひゃー」
次郎３「さすがにそれ見たら、俺もう収めるしかないなって思ってさ」
吉田２「え？ 結婚すんの？」
次郎３「たぶん、そうなると思う」
吉田２「うひゃー」
次郎３「あいつバカだから心配になっちゃって。だって名前彫るってさ。いくらなんでも…」
吉田２「なんだ。幸せものじゃねえか」

省吾３「じゃあ、行ってくるね」

省吾３、立ち上がる。
紀子１と光希１、早足でやってきて、省吾３の前に立ちはだかる。

省吾３「なんですか？」
紀子１「失礼します」
省吾３「すいません。いま急いでるんですが？」
光希１「…わたしたち、実は法律事務所のものでして」
紀子１「調査員です」
省吾３「なんの用？」
紀子１「すいませんが、ここを動かないでいただけますか？」
由佳３「なんですか？ ぶしつけな」
光希１「申し訳ありません」
紀子１「しかし、お年寄りを騙すのはよくないですね」

受付３（場内アナウンス）「盛岡競馬第 12 レース。投票券締め切り１分前になりました。

投票される方はお早めに自動券売機にてお買い求めください。当場外券売場では、自動券売機での締め切り後、投票券の販売等は一切行っておりません。何卒、ご了承のほど、お願いいたします。また、自動券売機以外での販売行為を見つけられた場合は、お近くの係員までお知らせください」

マークシートに記入していた橋本３と秀人３、慌てて自動券売機へ。

紀子１「僭越ながら、わたしたち調査いたしました」
光希１「（香織を示し）そちらの方のご子息が私どものクライアントでして」
香織３「…あのバカ息子がなんだって？」
紀子１「財産を騙し取られているのではないかと危惧されておりまして」
香織３「誰が騙されてるって？」
省吾３「大丈夫。ばあちゃんは大丈夫だから」

吉田２「…あれ？ でも、あれだな。その話どっかで聞いたな」
次郎３「なに？」
吉田２「女が男の名前、タトゥーで彫ったって話」
次郎３「誰だよ？ その話してたの？」
吉田２「ん？ …ちょっと待って。思い出すから」
次郎３「誰？」

（場内のサイレンが鳴って、すべてのモニターが点滅する。「投票締め切り」の文字）
観客たちが一斉にモニターを見る。

受付３（場内アナウンス）「盛岡競馬第 12 レース。投票を締め切らせていただきました。なお、当場外券売場では、自動券売機での締め切り後、投票券の販売等は一切行っておりません。何卒、ご了承のほど、お願いいたします。また、自動券売機以外での販売行為を見つけられた場合は、お近くの係員までお知らせください」

モニターの向こうで、出走準備が始まる。

香織３「…次のレース、買えなかったのかい？」
省吾３「うん。ごめん」
香織３「そうかい。…残念だね」
紀子１「失礼ですが、あなたは賭け金を着服されていたんですよ」
光希１「それも、今日だけじゃありません」

紀子１「合計だとかなりの金額になります」
香織３「…偉そうに。そんなことは、とっくに知ってたよ」

香織３、省吾３、紀子１、光希１、黙る。

秀人３「まずは血だろ？」
橋本３「血統は見てるよ俺も」
秀人３「じゃあ、後は、馬の面見りゃわかるだろうがよ」
橋本３「いや。馬体も面もいいと思ったよ」
秀人３「お前の買ったやつ、俺はいいと思わないな」
橋本３「そこは好き好きだから」
秀人３「お前さ。名前に引っ張られてんじゃねえの？」
橋本３「確かに。それはちょっと、あるかもなあ」
秀人３「ダメだよ。名前は参考になんねえよ」
橋本３「でもなあ。勝つ馬は名前もいいんじゃねえの？」
秀人３「さっき勝った馬、ムラタキシリトールだぞ？ 勝ちそうな名前か？」
橋本３「いや。スッとしそうだけど。名前だけだったら買わねえな」
秀人３「だろ？ 名前は都合で変わるんだよ。馬の体は変えられねえだろ」
橋本３「そうだけどさ」
秀人３「馬だけ見てりゃいいんだよ。馬が走るんだから」

香織３「お駄賃みたいなもんだよ。この人たちはここまで連れてきてくれるからね」
紀子１「しかし」
香織３「礼儀もわきまえてるし、わたしに優しいからね」
省吾３「ばあちゃん…」
光希１「いや、だからと言って」
由佳３「でも、おばあちゃん、大穴を当ててみたいって」
香織３「それはね、別にお金が欲しいわけじゃないんだよ」

吉田２「…そっか。信治郎だ」
次郎３「え？」
吉田２「あの。ホラ、藤森さんの現場についてるヤツ」
次郎３「…ああ。いたね、そんなやつ」
吉田２「そいつの女が、やっぱり腕に信治郎の名前入れようとしてて」
次郎３「ふうん…」
吉田２「でも、信治郎のヤツさ。女が彫ってる途中の状態で見つけて。

まだ腕にローマ字で『JIRO』ってしか彫ってなくてさ。それでちょっと揉めて」
次郎３「…お前、その女の名前知ってる？」
吉田２「え？ …あ。そういうことか」
次郎３「教えろよ」

香織３「…ありえないって言われることが起きるところ、わたしはそれが見たいだけなんだ」
省吾３「ありえないこと？」
香織３「そうだよ。ありえないことが起きるのはワクワクするじゃないか。誰も勝つのを信じていないような馬が勝つなんてね。…それこそ、わたしだけしか信じていないような馬がね」
由佳３「…それだけ？」
香織３「それだけだよ。お金じゃない。くれてやるよ。大切なのはそのあいだの時間なんだ」
省吾３「あいだ？」
香織３「そうさ。馬に賭けてからの時間。レースが終わるまでのあいだ。そのあいだは、ありえないことが起きるかもしれないって想像できるじゃないか。…起きないかもしれない。でも起きないとは誰も言えないからね。レースの間は、その、どっちもある時間なんだ」

モニターの前にわらわらと観客たちが集まり始める。

香織３「わたしはね。そのレースの間にね。思うんだ。このレースの後に、わたしは別のものになってるんじゃないかって。わたしはわたしのまんまなんだけど、何か別の世界にいるようなものにね。…もしかしたら、なにか本当にありえないことが起きて、わたしは、わたしから解放されるんじゃないかってね」

モニターの向こうで、レースが始まる。
数名の観客が拍手する。「いけー！」と歓声が上がる。

香織３「…バカみたいかもしれないけどね。本気で思ったりするんだよ。どんどん忘れていくばかりの、この、わたしからね。解放されるんじゃないかって。…大好きだった周りの人がすっかりいなくなってしまって。…一人だけ。こうやって。残ってしまった」

香織３、黙ったままの省吾３、由佳３、紀子１、光希１を見る。
香織３、展望テラスを見て、

香織３「ちょっと風に当たりたいね」
由佳３「…あ、テラス。はい」
省吾３「うん。こっち持つからね」

由佳３と省吾３が香織３を抱え上げる。
香織３を展望テラスの外に連れて行く。テラスの椅子に座らせる。
香織３、椅子に座って、外の景色を眺める。
足元の国道４号線が走り、ずっと遠くにかすんだ山の稜線が見える。

香織３「ああ。そうか。ここからも磐梯山と安達太良山は見えるんだね」

壁に備え付けられた、または天井から吊るされた多数のモニターを見つめている観客たち。
レースの様子が中継されている。

観客たち「お、きた」「させー！」「ありゃダメだ」「そのまま。そのまま！」「出てくんな！」

歓声が上がり、モニターの向こうで、レースが終わる。

観客たち…投票券を破る・喫煙所にタバコを吸いに行く・椅子に座って新聞を覗き込む・
次のレースのマークシートを記入する。等々。
係員たちが場内を巡回している。

香織３「いい天気だね」

香織３、テラスからの景色を眺めている。